

## 日教組の第53次(さいたま)教育研究全国集会参加記

佐々木 享

日教組の第53次教育研究全国集会の技術・職業教育分科会は、2004年1月にさいたま市で開催された。提出されたりポートは、中学校18、高校6で、その中には病院内に開設されている病弱児のための擁護学校からのりポート1も含まれる。わたくしは共同研究者の一人として参加したので、ここでは、中学校の技術教育分散会を中心に、印象的なことのみ述べる。領域別にみると、機械関係のりポートがなかったのは残念だった。

### 工具、機械の学習を大事にするものづくり学習

決して財政豊かとはいえない自治体の中で、工具、機械類を公費で揃え、「ものづくりにおける工具の扱い」と題して、1学年から3学年にわたる技術科の授業の中で、ものづくりに走るだけでなく、人類史の中の道具の歴史から始めてつねに工具、機械の学習を重視しているという岩手から提出された実践報告は好感をもって迎えられた。

この他にいくつかの県から、工具の扱いなどものづくりの基礎・基本をきちんと教えることを重視している実践が提出されたことは嬉しかった。

### 工夫が見られた「情報とコンピュータ」の実践

ホームページを立ち上げて自己紹介をさせる、コンピュータで新聞を編集する、という類の技術科の授業とは到底いえない実践は、(現場では相変わらず多いのかも知れないが)全国集会の場ではさすがに次第に影をひそめて、技術教育の観点を重視する制御に関する教材が工夫されるようになってきたのは嬉しいことである。

こうした中で、「PICマイコンを用いた電子サイコロの制作」を報告した岡山の実践はよく工夫された題材として注目された。ただしこの報告を聞きながら、コンピュータ技術に関する教師の力量にはまだまだ幅があるので、この間隙を埋めることは今後ますます重要になってくると感じられた。

### 木材学習は、実質的には融合教材で

ミニチュア椅子づくりなどのいわば伝統的な教材による実践もあったが、鹿児島から提出された間伐材を利用した電気スタンドづくりなどの実践は、時間数が限定される中でたんなる木材加工学習でなく、電気学習や金属加工学習をふくむ融合教材として注目された。また、わたくしが知らない世界であるためか、木製オカリナ製作という実践には驚いた。

### 電気領域で注目されたエネルギー関連のレポート

電気領域では、エネルギー変換に焦点を合わせた実践が、近年多くなっている。今次集会に提出された自転車の発電機などの題材もその一つである。

今次集会では静岡が、選択の技術の時間に、大小二つのペットボトルを二重にして中に回転子を入れ、そのまわりにコイルを巻き、回転子の軸に付けたプロペラを風力で回転して発電させるという、風力発電機を製作させた実践を報告した。これは、静岡大学の増田好治氏が開発した教材であるという。その製作過程にはペットボトルやアルミ缶の切断、穴あけ、接着、折り曲げなどの加工方法、ダブルナットなどの締結等の技法、整流回路の設

計と製作など豊富な内容がふくまれ、プロペラの製作にはたくさんの工夫が求められる点でも面白い題材である。電気と加工の学習を融合させた教材である。

### 元気な栽培の実践

学習指導要領や教科書からは予想されないし、履修率も小さいと思われる栽培のレポートが3件もあった。いずれも極めて元気な報告だった。新潟は、バケツを利用した稲栽培、バスケットを利用したエダマメなど容器(バスケット)栽培の実践を報告した。大分は、二年生の「ものづくり」学習に平行して無理に生み出した数時間を比較的手がかからないサツマイモ栽培に当てたと報告した。水はけをよくするために畝(うね)を作った場合、畝なしの場合、ミカンコンテナで栽培した場合に分けてすすめた。費用がかかったのはミカンコンテナと培養土の購入のみ、サツマイモの苗は自治体の農政課から無償でわけて貰ったが、植え付けが遅く、授業計画の都合で少し早めに収穫したのでイモも期待ほど大きくなかった。それでも通気性がよい程イモは大きくなるという生徒たちの仮説は検証できた、などとのべた。これらの報告についての質疑が多かったことも関心の高さを示唆していた。

### 相変わらず多い「問題解決学習」

実践そのものは面白い内容なのに、その趣旨を無理やり「問題解決学習」としてこじつけて説明しているレポートが相変わらずみられた。この種のレポートが若干の特定の県からとくに多いことを、わたくしは、いつも考えさせられる。

### 技術科の授業時間のやり繰り

極端に削減された技術科の授業時間のやり繰りについては、多くの苦勞が語られた。少なからぬ授業実践が選択制の技術科のものであったことも、困難な状況を示唆していたと

いえよう。こうした中で、みんなが持てあましている「総合的な学習の時間」を実質的に技術科の授業として活用する方式、選択制の時間を学校選択の技術科として行う方式なども公然と語られた。教務係などから疑問が出されるといわれ、共同研究者としても『日本の教育』などに県名を挙げて記録することは憚られたが、政策の矛盾を浮き彫りにするものであった。

### バラエティに富んでいた高校からの報告

高校からは、工業高校の再編問題、国家試験をめざす土木科の実践、体験学習、福祉科の実践など、多様なレポートが提出された。福祉科のレポートは、今次の学習指導要領改正で新設された教科「福祉」に関する専門学科のもので、注目された。しかし、報告者が当該教科専門の教師でなかったためかも知れないが、実習をふくむ専門性が福祉の名前に価値するほど深くないし、条件整備も不十分である印象は否めなかった。

技術・職業教育に関するレポートとは言えないテーマだった(どの分科会が適切なかわたくしにも判断できなかった)が、学童保育所が社会的認知を得ていない(開設率全国で最下位から2番目という)県の小都市で学童保育所づくりに奮闘した「女性が働き続けるために」と題した商業高校の女性教師による実践報告には、頭が下がった。この報告は、子育てをめぐる現代日本の施策の貧弱さを浮き彫りにするものであったといえる。

### きつかった日程

今次集会の分科会討論は、まる2日と設定された。朝9時から午後5時30分までという長時間、2日間も注意力を集中し緊張を持続させるのは容易ではなく、きつかった。これはわたくしの年齢によるばかりとは思えなかった。

(ささき・すすむ 技術教育研究会常任委員)